

鹿島灘上陸に備えて  
茨城では



## 決戦準備の跡を訪ねて

太平洋戦争末期、日本の戦争指導者たちは、国と国民の運命をかけた本土決戦の準備に全力をあげていた。負け戦になるのを承知の土で・・・茨城に本土決戦の大軍団を配備し、決戦準備を始めたのは、主として昭和二十年に入ってからである。

それは、八月の終戦までの僅かな期間のあわただしい動きであったし、軍の機密なので、全県各地に配備された部隊がどういう任務をもっているのか、どんな作戦を展開しようとしているのかは、いっさい明らかにされていなかった。

その上、僅かな資料も、終戦と同時にほとんどが焼却・破棄されてしまい、構築された陣地も壊されたり、埋められたりしてしまったので、形を残しているものは極めて少なかった。

そういうこともあつてのことだろうが、戦後に刊行された戦史などを繰ってみても、決戦軍について、詳しく紹介している史実はほとんどみあたらなかった。

私が会員になつている茨城県平和委員会という市民団体が、戦後五〇周年の記念事業として、「茨城の戦争展」展示パネルの作成を企画した。

私もその作成に参加して、「本土決戦と茨城」「特攻隊と茨城の特攻基地」の二つのテーマの作成チームに加わつた。

「本土決戦と茨城」のチームは、つぎのことを重点に作業をすすめた。

- ・ 鹿島灘沿岸配備軍とその陣地
- ・ 戦車旅団などの決戦軍の装備・戦力と陣地
- ・ 本土決戦の『特攻』

しかし、前記のような資料不足の壁があつて、展示パネル作成の作業は遅々と進まなかつた。

そこで、私たちは友人・知人に、本土決戦に関する情報提供を依頼することにしました。

有り難いことにたくさん情報がよせられてきた。

しかし、その多くは、「私の村では国民学校が兵舎として使われていた」とかこつちの隠居屋に将校たちが寝泊まりしていた」とか「私は中学生だったが学校には行かず、軍の壕掘りに毎日勤労働員された」などの情報が大部分で、その特

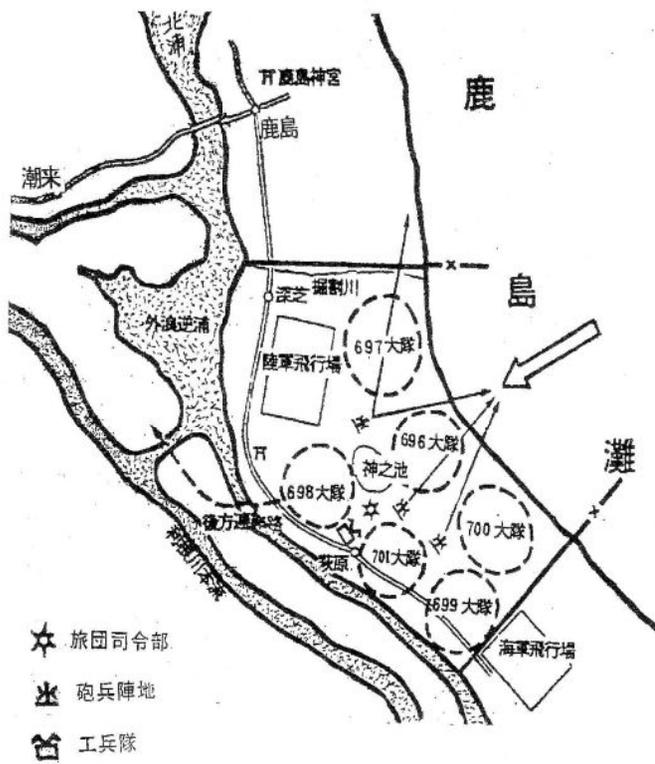
期の緊迫した状況を知る上では貴重だったが、その遺跡がいまも残っているという話は少なかった。

### 「町域は兵隊だらけ」―神洒

寄せられた情報のなかに「神栖町史」の本土決戦部分のコピーがあった。それをみると、鹿島灘沿岸の地域に、軍の大部隊が配備されたいたこと。そのために、地域がどのように様変わりしていたかを知ることができるので、参考に紹介しておく・・・

「神樹町史」のその部分には。

―昭和二十年五月七日、第一総軍司令部は、沖縄戦の戦況から、米軍は秋頃、九十九里浜・鹿島灘に上陸し、東京の占拠を図るであろうとの情勢判断を示し、五月二十三日には多数の部隊を臨時編成した「第三次兵備」が発令された。「第三次兵備」により五二軍は銚子以南を担当することになり、五一軍には第二二一師団・独立混成第一一五旅団・独立第一一六旅団が配備され、県北・県南の太平洋沿岸地域の防衛を担当する新戦闘序列が編成された。ここで本土防



神栖に配備された第115旅団

衛のための兵団の基礎配置が決定されたのである。居切堀と日川浜・横瀬との間の防衛は相葉健少将の率いる独立混成第一一五旅団が担当することになった。第一一五旅所は鹿島神宮の鹿島道場に仮設された第二二一師団（師団長長沢三郎中将）の配属下におかれ、七月には旅団司令部が町域のほぼ中心にあたる芝崎に設置された、そして、独立歩兵第六九六大隊・六九七大隊・六九八大隊・六九九大隊・七〇〇大隊・七〇一大隊・旅団砲兵隊・工兵隊・通信隊が芝崎・神の池付近に配備されることになったのである。

六月二十三日には沖繩が陥落し、秋頃には米軍が関東地方に來攻すると確信した第一総軍司令部は、主戦面を太平洋方面に限定し、従来の陣地をさらに水際近くに推進して上陸部隊を水際近くで撃滅させる、いわゆる水際作戦を主とした「第一総軍決号作戦計画」を策定した。これにより、八月上旬には独立混成第一一五旅団の独立歩兵六九六大隊が奥野谷、六九七大隊が深芝、六九八大隊が木崎・息栖、六九九大隊が日川、七〇〇大隊が知手、七〇一大隊と旅団工兵隊が萩原付近に陣取り、沿岸陣地の構築に着手した。また、米機動部隊の鹿島灘上陸を阻止するために神の池の北側と南側、それに知手区内に砲兵陣地の構築が急がれた。しかし、町のような砂土地帯では造成が容易でないことや、

既に述べたように第一総軍司令部はかねてより米軍の利根川侵入利用針画を阻止するため利根川河口付近の防備を重視しており、七月には利根川閉塞に関する計画の策定を第一五二師団長に命じ銚子付近を作戦上重要地点と確定したことにより、砲兵陣地の造成は銚子方面に移されていった。

ところで、「第三次兵備」によって町域に独立混成第一一五旅団が配備されたが、増加部隊のうち第七砲兵司令部以外は全部動員部隊であった。極端に人員と武器が不足している状況での動員は、欠員・欠数のまま兵団編成を終了し、あとから逐次補充するというもので、編成上の陣容と実際の兵力との間には、かなりの隔差があった。中略

終戦直前の町域は兵隊だらけになったのである。水際作戦を遂行するために配備された兵士の日課は、草履ばきでの竹槍訓練とタコツボ（身を守る穴）掘りであった。米軍が上陸すれば真先に攻撃されるのはタコツボの掘られた浜部落である。近辺に神の池飛行場のある居切浜では、ほとんどの人が親戚や知人をたよって本村に避難した。

- 1 第一総軍とは 関東地方に配備された本土決戦軍の総司令部
- ・ 決号作戦とは 米軍の日本本土上陸に備えて立てられた作戦計画

## 山林の中に「ざん壕」一群が ― 鉾田

「橋部隊が掘った地下壕があるそうだ。地元の人が案内してくれると言っている」

北浦村の友人内田泰山さんから嬉しい誘いの声がかかってきた。さっそく訪問した。鉾田町の串挽地区だった。

地元のお年寄りに伴われて串挽地区の高台の、畑地の奥にある山林に案内された。

あまり人も通らないような道を下っていくと、そこは篠竹や雑木で荒れた窪地だった。

「そこに崩れた跡があるでしょう。ここが壕の入り口だったのです。」

たしかに崩れ落ちた痕跡が残っていた。そこから、盛りあがっている林の下を掘り進んでいったという。

「どこまで掘ったか分からないが、かなり奥深かったようです。出口は見当ませんね。終戦と同時に入り口を崩してしまったので、兵隊以外に入らな

った人はありませんね。崩れたところに大きな杉の樹が立っているでしょう。あれはね、穴の入り口を空から隠すために挿した杉の枝が根付いて育ったものなんですよ」

幹の直径が三〇センチもある杉の樹が、戦後三〇年の樹齢を誇示していた。この地下壕は、近くの串挽国民学校（小学校）を兵舎にしていた橋部隊が、米軍の爆撃から身を守るために作った待避壕のように思われた。

この後は内田さんの案内で、高台から下って、別の山林の中にある陣地跡を見に行った。

その林の中に奇妙な形をした穴が



鉾田串挽の地下壕入口

あった。四〜五メートルくらいの「コ」の字形で、深さは人が入ると頭が出るくらい穴だった。それが一定の間隔を置いて多数点在していた。

「これも橋部隊が造ったのだとよ。塹（ざん）壕（ごう）というものなのかな？」

上陸して侵攻してくる米軍を迎え撃つために造った陣地なのか、それとも訓練として掘ったものなのか、陸軍について予備知識を持たない私たちにはさっぱり分からなかった。高台にある地下壕とどんな関連があるのかも・・・

この穴が、軍の陣地跡とは知らない者たちの仕業であろう。いくつかの穴にはゴミが捨てられてあった。

「ひでーなあ。この穴もごみ捨て場になっている」

「それでも良かったと思うよ、兵隊さんたちの墓場にならなくて」  
私たちは、そんな話今しなから松林を後にした。

・ 塹（ざん）壕  
歩兵部隊が戦場で、その中に入って身を守りながら敵を迎え撃つ溝状の壕

## 海に向かって口を開く砲座 ― 大洗

「大洗に地下壕陣地があつて、その陣地の砲座跡がいまも保存されて残ってるそうだ。一緒に見に行かないか」

と、土浦の井上仁志さんから朗報が入った。

井上さんは平和委員会の役員で、以前は大洗に住んでいたのです、そういう手ずるで情報を入手してくれたのだった。

さっそく、私は井上さんに伴われて大洗の地下壕陣地の在った現場を訪れた。

井上さんが入手した資料によると、大洗市街地の西の高台にある磯浜小学校と中学校（当時は国民学校）の地下に陣地が構築されていて、小学校の地下には「鉄壁坑道」とよばれた地下壕陣地が、中学校の地下には「義経坑道」という地下壕陣地が構築されていたのである。

いまも保存されている砲座の開口部は、その「鉄壁坑道」の海岸側の崖の中段、西福寺の本堂の裏に口を開いているという。